

第5回留学報告書

2025年6月 FOS 2023 安藤 宏紀

二年目の春タームが終了しました。今学期は授業を3つ履修し、残りはあと2科目となりました。残りの2つの授業は、Minor degreeの取得のために疫学分野の授業を選択する予定です。どちらの授業も私の研究内容と関係しており、非常に楽しみにしています。ただし、普段あまり接する機会のない人たちとグループワークをしなければならず、正直なところ少し気が重い部分も否めません。グループワークでは笑顔を振りまくりながら頑張りたいと思います。

年明けの指導教官とのミーティングでは、夏頃に博士候補生になるための試験（Comprehensive Exam）を受けるよう伝えられました。その準備として、以前執筆した研究計画書の修正や、先行研究の整理を進めていました。また、それと並行して論文の修正作業も行っていました。目に見えるような大きな研究進捗は得られませんが、これらの過程を通して、見落としていた知見や曖昧な理解を見つけることができ成長もできたような気がします。

授業も研究も順調に進んでいると思っていた矢先、潰瘍性大腸炎を発症してしまいました。潰瘍性大腸炎は、大腸の粘膜にびらんと炎症が生じる疾患で、日本では指定難病に分類されています。現代医療では未だ原因が特定されておらず、確立された治療薬も存在しないようです。大腸を全摘出すれば症状はなくなりますが、それは最終手段です。幸い命に関わる病気でなく、寛解期では健常者と同じような生活をおくることができます。ただし活動期に入ってしまうと、慢性的な腹痛や下痢、血便に苦しみます。私も症状がひどいときには、一日で15回以上もトイレに行き、ひたすらトイレの水を真っ赤に染めていました。真夜中にトイレに行きたくて起きることも珍しくなく、腹痛で悶絶しながらトイレに籠っておりました。このような活動期ではトイレに行きたくなるタイミングが読めないのが、外出や人と会うのが恐怖でしかありません。また、症状を悪化させないように脂質・ナッツ類・食物繊維などを多く含む食材やアルコールなどの摂取を控える必要があり、ダイエット中のアイドルみみたいな淡泊な食生活を強いられます。そもそも、活動期にご飯食べると必ずトイレに籠る未来が待っているため、食事をする気がなくなります。おかげで、発症後からQOLはとんでもなく下がり続けて、体重も10kg近く減ってしまいました。まあ前年で15kg近く太ったので昔の体型に戻れたことは良いことでした。

日本では、潰瘍性大腸炎の患者が約1,000人に1人いると推定されていることもあり、治療薬の開発が活発に進められているようです。現在利用可能な薬は、基本的に寛解期を維持し、日常生活をこれまで通り送ることを目指して設計されています。薬を服用していても再び活動期に入るリスクや不安は常にありますが、自分に合った薬を継続して服用することで、多くの方が長期間にわたり寛解期を維持できているようです。私も、5月頃に日本へ帰国し、自分に合う薬を見つけるための治療を続けています。本来であれば「効果のある薬が見つかりました」とご報告したいところですが、残念ながら、最も有効とされている第一選択薬が効かず、つい先日大学病院おくりが決定しました。当初の予定では、薬によって寛解期に入り、その状態を維持しながら、できるだけ早くアメリカに戻るつもりでしたが、計画通りには進まず、Comprehensive Examの日程も調整せざるを得ない状況となっています。現時点では、新たな薬や治療法の中から効果が見込めるものを試し、

症状が安定してからアメリカへ戻る予定です。それまでは、日本にいながらでも進められるデータ解析や論文執筆などの研究活動に集中し、前向きに取り組んでいくつもりです。

これまでの人生で健康に苦労したことはなく、予想外の展開になってしまいました。ただ、まだ Ph.D 課程の折り返し地点は迎えていないので、焦らずに体調を整えてから再出発したいと思います。最後になりますが、これまで多大なるご支援を賜りました船井情報科学財団の皆様に、心より感謝申し上げます。